

出したりしてさうく夜が明きました。かゝる無用の事を考へたかといつて詰つたものではない。たゞ自分に關係した些細な事を唯々深く考へたかといつて誠につまらない。地方でも實に些少なる事を氣にして人と争ひ不和を生じ延いて一郷一村の不利を招く事がある。世の中に唯自分の事ばかり考ふる者がある、あの泥棒は矢張自分ばかりの事を考へるものです、彼等の頭には親もなければ妻子もない。所謂自我の觀念のみが働いて居りますから人の物まで取つて自分の物にしようとするのである。これではいかん即ち自分は一家の自分である。一村の自分で又一郡の自分一縣一國の自分といふ事を考へねばならぬ。唯自分一人の事ばかり考ふるご前云ふ泥棒となるのである。共同といふ事も人と共同するのではいかぬ人と一体にあらねばならぬのである。

次は努力についてお話いたします。

之れを平口に申しますればほねを折る事で人は自分のため村のためお國の爲めに努力せねばなりません。今や歐洲大戦乱でございますが戦後日本は如何なる影況を蒙るでありませうか、吾帝國の位置は如何でせうか、吾々國民は大に今より奮勵努力を要する次第と考へます。世の中には人の富貴を見てゐる方は幸運だ自分などは年中一生懸命働いて居るけれど誠に不進不幸のみである。あの人は前世のいんねんがよいのだ吾々は稼いでも全く駄目だなどいつて居る者があるが此は大なる間違ひである。此の世の事は此の世で算盤を立てねばならぬ。努力すれ

ばした丈けの効果はあるものだ。獨逸のシュッペンハールは因果論に於て世に運不運はないのだ。甲が七年かゝつて出来た仕事を乙は五年丙は三年にした丙は運がよいからだと云つてしまふのは宜しくない。それはそれだけ努力して居るのである。世には肉体上の因果と働く上の因果と精神上的の因果の三つがある。梅園先生の如きは精神上道徳上の努力を積まれたから後世永遠に追慕尊敬せらるゝのである。人は健康で金持ちで而かも善人であつたらうれこゝろ鬼に金棒結構な事だがこの中で善人たる事が一番六ヶしい。道徳的努力の内でも正直といふ事は尤も大切である。英國のアームストロング會社には三千人位の職工が居りますが各自何時間働いたか正確に帳面に記して歸つて行くが少しの間違ひさへない。日本をどうでしようでない八幡の製鉄所などは狭い柵の間を通らせて一々身体検査をする。それはその日の賃錢よりも値高な品を持つて歸へるのでかくも無用の時間と役人などを要する次第である英國を始め歐米文明國はかゝる道徳的行爲は余程發達してゐる。日本などは誠にか恥しい次第です。各人の道徳的努力が足りない爲め一般の制度が細密を極め所謂繁文縟禮で事業の發達を沮害する事が夥しい。これはお互に反省し以て一段の奮勵を要する点と思はれます

次に報恩につきましまして一言いたします。

鹿児島縣の人花田中佐は自分の年金などは悉く報徳會へ寄附して報徳主義の下に大活動をしてゐる方でございます。或る人が花田中佐に向つて金の寄附を申し込んで云ふには聊かですが村

の爲めに私はこの金を……中佐はこれを聞いてそれは私の意に叶ひません。あなたは村に恩をさせる様を申し分であるが、お互に村には村に對する恩がある、その恩に報ゆる爲めならば受け入れませうといはれた相だ。梅園祭などもこれ又一つの報恩の意味に考へねばなりません。人は親に對し君に對し奉り國に對し天地に對し夫々大なる恩を受けてをります。報恩は唯金錢のみで果し得るものではない。どこ迄も精神的報恩の大努力がなければなりません。ただお話ししたいが本日はこれでご免蒙ります。(拍手) (文責記者にあり)

三浦梅園先生と長崎の學者 (寄稿)

第七高等學校教授文學士 武藤長平氏

梅園先生の事蹟は漸次顯彰されて諸方面から學者が研究するやうになりましたことは實に學界の慶事と存じます。

私は今此に梅園先生と長崎の學者との關係に就きまして管見を述べたいと思ひます。

御承知の通り長崎と申す土地は舊幕時代には海外文明東漸の門戸でありまして支那和蘭の文明は此の小さい口から日本全身に學問的營養を送つて居たのであります、特に九州の諸藩は長崎に近いから其影響を受くることが大でありまして佐賀福岡熊本鹿児島諸藩は勿論のこと豊後の七藩三邑、豊前の中津、小倉の二藩なども負けず劣らず長崎から海外文化の吸収に努めて

居ました、佐伯藩主毛利高標公や中津藩主奥平昌高公等最も多く長崎を利用された方々で就中毛利高標公の好文愛書は天下無双であつて態々長崎まで藩士を遣はされて唐本や蘭書を購入されましたから其藏書は實に八萬本に及んだといひます。現に大分市にある福澤記念圖書館にある「佐伯文庫」の藏書印ある幾多の珍本は皆高標公の遺寶であります、高標公昌高公の好學崇文は飛離れて居りますが其他豊後の七藩には學問好きの殿様が出てられたとみえまして其藩校は隆盛で藩士は學術を嗜むといふ風習が全豊後に行き渡りまして數多き學者が排出しました、其中で最も傑出したのが吾が梅園先生だと信じます。

梅園先生は御存知の通り始終二子山麓に隠れて諸侯の禮聘を退けて居られましたが其學問的良心は健全で其研究的態度は熱烈でありました、其結果は先生が此世に遺されました等身の大著述によつて証明されます、而して先生は餘り旅行はされませんやうでしたが長崎へは二度出發されました、是は全く自己の見聞を廣め智識を磨かんが爲に外ならずと思ひます。最初の長崎旅行即ち延享二年の秋先生が二十三歳の時のことは惜いことには先生の日記がありませんから確たることは分明しませんが其延享二年は恰も長崎通詞に限りて蘭文を讀むことを公許された時の二度目の長崎行は先生自ら書かれた「歸山録」二巻といふ土産がありますから事頗る明瞭であります、即ち先生は長崎に於て大に智識を磨き見聞を廣められました。

梅園先生は長崎では代官高木氏の補佐役になつて居ましたかの讃岐小比賀伯鱗が八百屋町の宅に二十三日間逗留されましたが専ら和蘭通詞吉雄耕牛と全通詞松村翠厓とに就いて以文の交際をなされました。かの清人程赤城も此時交際されたやうで、先生は此行三人の益友を得られたのであります。

吉雄耕牛は所謂吉雄流外科の鼻祖で「布欵吉徴毒論」「因液發備」「蘭方書」「紅毛秘事録」「阿蘭陀揚科之書」「紅毛流膏藥方」「吉雄流外科」等の著述があるのみか青木昆陽、前野良澤、杉田玄白等の師たる人でありませぬ。

松村翠厓の傳記は詳でないがかの和蘭甲比丹イザックヤ、シグと親交のあつたことは有名で、シグの推薦で當時の薩藩主島津重豪公に仕へたことがある、この翠厓は非常な學者であつて吉雄耕牛や中野柳圃(志築忠雄ともいふ)と比肩する和蘭學者であつた、當時蘭醫公子として天下の學者の數々を知つた重豪公に信任されたり。獨特の學風を持って豊後に隠れて居られた梅園先生を敬服させたりしたことに因つても翠厓の眞價は明である。

梅園先生と耕牛、翠厓二洋學者との會談は蓋し双方の爲であつたと思ふ、二人の洋學者は梅園先生より其獨特の條理學を聞いたであらうし、梅園先生は二洋學者から西洋の天文地理を始めとし其外の學術技藝を學ばれたことである。

予は耕牛、翠厓二學者の事蹟やかの程赤城の遺問をも蒐めたいと思つて居るが一向有力な材料

を得ない耕牛の後裔は學友法學士吉雄永壽君であるが同家には何等の遺書や史料がないので之を三浦家に梅園先生の遺著遺墨が澤山保存されて居るのに比すると雲泥の差である。昔の碩學鴻儒であつても其名湮滅して稱せられない人々も少なくないのに梅園先生のやうに其名聲益顯はるゝのは實に賀すべきことである。(大正五年四月二十四日稿)

所 感

福岡縣立中學修猷館教諭 古 庄 榮 治 氏 (寄稿)

昨年のやうに今年も梅園先生の御祭日に村の人々が御祭を先生の御話をして先生の恩を忘れぬやうにしたりめい／＼に先生を手本に自分を磨くやうにするから私のやうなつまらぬものに又何か書いて送れと村長さんと校長さんごから申して参られました。私は昨年あんまりつまらぬことを書いて送りあつて恥かしく考へた位でありまして何にも知つて居るものではないかもしれませんが、それ以外の事と違ひますから遠慮なしにまたつまらぬことを一寸書いて送り誰様かに読んで戴きます。

さて人は子供が若者ごあり若者が一寸で中老となりさうしてすぐ老人となり間もなく此の世の人で無くなります、ほんごうに人の一生は夢のやうにある。

大關と云はると相撲取が元氣のつづくのも一寸でその土地々々で顔役口利きと云ふ人が巾のき

くのもほんの一寸の間で次から次に勢が後のものに移り世に時めくものが一寸で名も無く忘れられたやうになります。

之は人ばかりでありませぬ世の中は昨年發明の新機械が今年はもうつまらぬ時遅れのすたれものごなります。

分限さんも五代六代と續く家は誠に少いもので親の代の分限が子の代に赤貧乏となり親の代の貧乏が子の代には分限となるものが少くない。斯様な工合で今の時代々々で學者とか政治家とか云はれた者が死んで後十年二十年たぬ内に世間から忘れられてしまいます。

此の西武藏の谷にも何千年昔から人が住み今日まで幾十百万と云ふ人が生き死したのであるがどんなえらき人が昔あつたかどんな財産家があつたか千年百年前はおろか五十年前のことよくわからぬ位である。

るれに梅園先生は百二十年程前に御亡くなりであるが十年か二十年前に御亡くなりになつたのも同じやうに人々が梅園先生々々と云ひはやすではありませぬか丸で西武藏の谷には百二十年前には梅園先生があつた御一人御住居のやうなものである。

梅園先生の頃に西武藏より國東地方に大分えら者や財産家がありましたらうが梅園先生程名前も残り居る人はありませんな。

それで甚だ失禮な言葉であるけれどわかり易くする爲め例へて申すと梅園先生は百何十年の昔

から今日迄國東地方で一人舞台でありますな昔の如何なる財産家も智者もかなひません。之で見ると人のほんごうの價値は財産でもなければ顔形でもない人間の品といふものである人間の品と云ふのは今日人々が申しまする人格のことで人格のよきものが人間第一の寶物であります。

天神様であらうが楠正成であらうが乃木大将であらうが此の人間の品と云ふものがよくて國家の爲めになつたので人々から神様と祭られた譯であります。

此の人間の品がよくて學問があつたり業にたけたりして居るのが人間の最上のものである。

今茲に一つの山水畫の掛物があるとする大變よく出来て居つてどの点から云ふても非難のしやうのない名畫であるとする然るに其の畫を描いた人が大變悪人であるとか又その掛物が大變無理なことをして人を苦しめて奪つたものであるとかするごまうろの掛物の價値はがらりごさがつて床に掛けたり大切に仕舞置くと云ふ價値はなくなりませぬ。

人間が學問と云ひ才と云ひ辯と云ひ風彩と云ひ誠に立派なものであるとしたところでの人の心行ひが悪かつたならば丁度前の掛物のやうである、まうろの才も辯も風彩もつまらぬものなる。

梅園先生は掛物に例ゆれば繪も立派字も立派畫家も立派持主も立派とこから見ても申分のない人である。

人間は皆長生をしたいと思はぬものはないが十年か十五年長生したくて早く死んだとて早の長生の仕様と早死の仕様とで却つて死んだものは惜まれ生きて居るものは早くくたばしや何にかと云はれるものである。

人間は又金錢を澤山貯めやうと思はぬものは少ひしかし錢は大切なものであるけれども肥料のやうなもので澤山ためたとしてつかわねば價値の出ぬものである肥料がつかひすぎても悪いやうに錢もつかひすぎてはわるひのは申すまでもないが長生でも錢でも死んだ後に何時までも勢力價値のあるものではない人の死んだ後一番價値のあるものは其の人の持つて居つた徳といふものである。

前申した通り今日如何なる俸給取りでも政治家でも一旦その役をやめるとすつと名前が消え又死んで後名前の失せる人が多い。

如何にしても名前の失せぬのは大徳のある人である世の中は徳の高い人が殖へるのが人間全体の利益が増すのである此の縣から出られてゐる國會議員の元田さんと箕浦さんの二人は今日の政治家の内では人間としての品のよい人である私は元田さんや箕浦さんのやうな立派な人が大分縣から出て居る代議士であるのは肩巾廣く思ふて居る。

自分の村自分の郡縣自分の國に品のよい人が殖へることを望む幸西武蔵は梅園先生の様な大徳の人を出して居るから人々には賢いとか賢くないとか強ひとか弱ひとかの差別はあるが梅園先

生の徳を手本とし梅園先生が不便の土地で不便の時世に學問に熱心せられた通り人々が百姓でも商賣でも何でも熱心になられ土地の發達國の進歩に少しでも多く盡すことを望むのである。

今日日本には改良進歩させねばならぬことが多ひが其中でも政黨のことは人々に大變深い關係のあるもので有るが日本の政黨は田舎でも都會でも譯なしに昔の源氏平家と云ふ風になりて反對派のことは何もかも悪く云ひ隣の家とも不和にゐること云ふ有様であるが日本は今日源氏平家のときは大變進つて世界萬國と勝負をする時である。

政黨は悪いものではないが之をハキチがへて反對派の葬式には悦びて踊り反對派の祝言には御經を讀むといふやうなことになるては國家の爲めにも人々の爲めにも大變損なことである。

觸らぬ神に崇めしと云ふて政黨に頭から關係せぬのがよい事ではないから國の爲めに政黨に關係して盡すのはよいが前申した通り源氏平家と云ふことになつては國家の爲めに大變なことであるから之は人々が早く改良するやうに考へなければならぬと思ふ。

うことこの縣に風俗改良の話の會とか酒煙草をやめる會とかあるが盆踊をするとかせぬとか云ふやうな普通の風俗や酒煙草を飲む飲まぬといふことは直に國が亡ぶるか何と云ふことにはならぬが今日の有様では政黨のことは都會でも田舎でも大きな問題と思ふ。

梅園先生も政治のことで殿様に色々意見を申上げたことがあるし又今日先生の御祭日に話の會をするのはどう云ふことをめどに初めたか村長さんと校長さんとか送り下さつた書物に村の

風俗や人々の氣風をよくするゆゑであるといふことが記してあるからこのことを申すのである
今日御集の方には同志會政友會國民黨中立の色々の人々がありませうが何事に限らず人々の好
不好がある政治の意見も人により違ふことであるから黨派が分れるのはよいことであらうが
れはうれ丈として今日先生の御祭のやうに何黨派の人も一緒に四海波平と云ふ風に一般のこと
には平和仲よくすることが大切と思ひます。

梅園先生が今日此の世に御存在ならば必ず右様の御考へで村の人を導くことであらうと思ひま
す。
大分長く柄に似合ぬエラうなことを申しましたが昨年申した通り西武蔵と云ふ身内のもので
ありますから無遠慮に思付のことを述べたのでありますあまり長文句で又字が大變へたですか
ら御讀み下さる方も御聴き下さる方も御草紙と存じますこれで仕舞ます。 終

納税成績優良團體に對する表彰

表 彰 狀

西武蔵村大字糸永

杉山組 參拾貳戸

緝睦相率ヒテ公共ノ事ニ力ヲ竭シテ納税ノ如キハ明治四十四年度以降滿五ケ年間曾テ滞

納者ヲ見ズ今後倍協力此美風ヲ持續スベシ依テ本村納税表彰規程第二條ニヨリ之ヲ表彰ス
大正五年四月三十日
東國東郡西武蔵村長 小野元次

表 彰 狀

西武蔵村大字富清

中谷組 拾六戸

共同相率ヒテ克ク納税ノ義務ヲ竭シ成績顯著ナリトス今後倍奮勵以テ此ノ美風ノ發展ヲ期
スベシ爰ニ本村納税表彰規程ニヨリ別紙目錄ノ金員ヲ授與シ之ヲ表彰ス
大正五年四月三十日
東國東郡西武蔵村長 小野元次

善行者に對する表彰文左の如し

表 彰 狀

西武蔵村大字両子四百四拾番地

照男 母 林

明治元年九月二十四日生

資性温順孝養ヲ盡シ貞操ヲ守リ隣保ノ交情亦圓滿ニシテ敢テ人ト争ハズ年二十ニシテ父ヲ喪ヒ二十八歳ニシテ寡婦トナル登時僅カニ老齡ノ祖母及母並ニ子女二人ニシテ勞働ニ服スルモノナク家道衰頽ニ傾クト雖モ粉骨碎身夙夜家業ニ精勵シ毫モ倦怠ノ色ナク孝養益々努メ志操愈堅ク子女ノ教養ニ意ヲ注ギ専ラ祖先ノ遺風ヲ墨守シ勤儉力行纖弱ノ身ヲ以テ能ク家政ヲ整ヘ一家ヲ維持スルヲ得ルニ至レリ

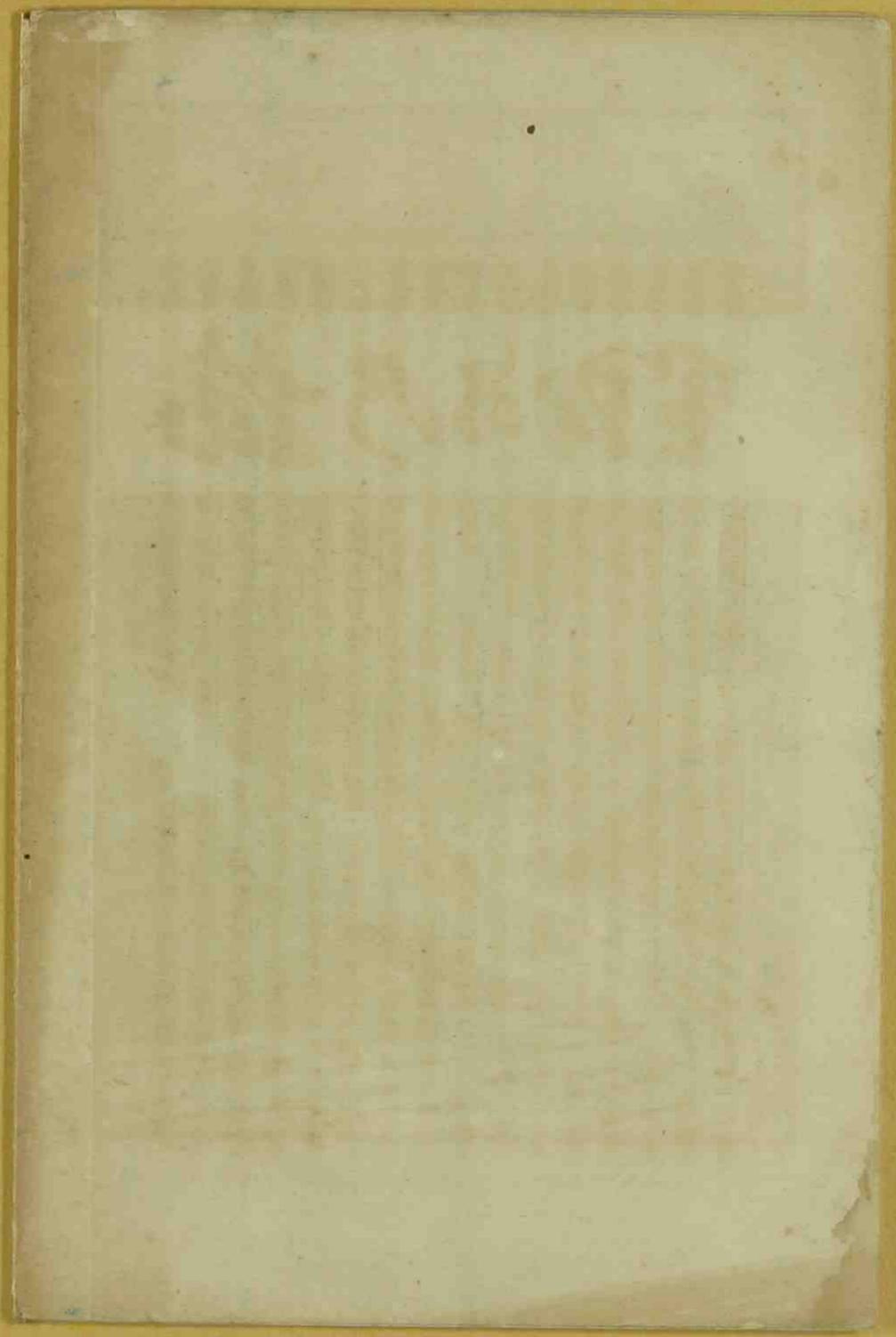
如斯ハ稀ニ見ル所ニシテ其德行卓絶闔郷ノ模範トスルニ足ル依ツテ別紙目錄ノ金員ヲ授與シ其善行ヲ表彰ス

大正五年四月三十日

東國東郡西武藏村長 小野元次

- 本會委員左の如し
- 委員長 小野元次
副委員長 宮本金六
委員 小田原政尾 林恒策 林長六 田上淺五郎
三浦壯 財前文吾 淵上甚策 水元九平

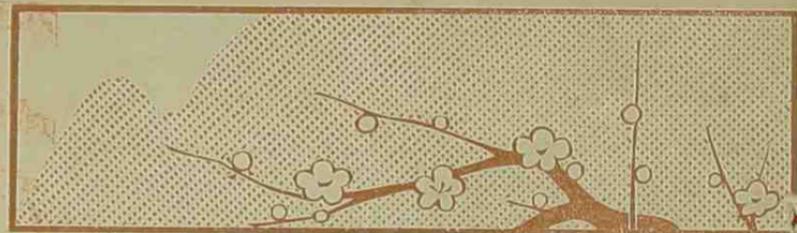
- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 藤原俊次 | 種田潤六 | 植田高代 | 渡邊重太郎 |
| 猫橋五六 | 岩丸平作 | 秋吉波治 | 三浦末吉 |
| 鶴田榮作 | 種田鉄男 | 三浦榮次郎 | 野田力 |
| 友成伊勢松 | 石川操 | 林金吾 | 小野猪次郎 |
| 栗林與兵 | 三浦昇 | 三浦丹次 | 三浦吉雄 |
| 井上熊治 | 上原安五郎 | 溝部松次 | 友弘清太郎 |
| 矢野文也 | 古庄甚策 | 古庄成 | 矢野完四郎 |
| 種田長太郎 | 種田説治 | 淵上清 | 林重治 |
| 井上厚男 | 村田伴藏 | 竹田津猛 | 財前録三郎 |
| 三浦元治 | 渡邊初次 | 堀口チヨウ | 中野榮 |
| 後藤直 | | | |



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵



大正六年七月二十五日發行



梅乃可成里



臨時號
梅園頌德演講會

第三回梅園祭並講演會目次

一、梅園祭並講演會趣旨	一頁
二、梅園祭式順序	一頁
三、表彰式順序	二頁
四、齊主祭文	四頁
五、委員長祭文	四頁
六、來賓祭詞	五頁
七、講演	
(一) 偶感	柴山 杵築 中學校長 七頁
(二) 死後の生命	島田 女子師範學校長 十三頁
(三) 偉人を偲びて	森 旨 學 校 長 十七頁
(四) 梅園祭に就て	河野 國東實科女學校長 二十頁
(五) 國民將來の覺悟	池 永 寶 陀 寺 住 職 二十四頁
八、寄稿	
(一) 梅園先生著 五月雨抄	武藤 第七高等學校教授 三十一頁
(二) 電燈の話	高木 工業徒弟學校長 三十五頁
(三) 吾が國東半島	河野 習 說校教諭 四十三頁
(四) 詩詠數篇	四十六頁
九、表彰文	四十八頁
一〇、梅園會々則及役員	四十九頁

梅園祭頌德講演會趣旨

三浦梅園先生ハ不世出ノ鴻儒ニシテ歿後百二十餘年ノ今日其學德益々光輝ヲ放チ明治四十三年本郡教育會ハ頌德會及ヒ墓前祭ヲ舉行シ同四十五年二月二十六日贈位ノ恩典アリ教育會亦本村民ト共ニ頌德碑ヲ建設ス梅園全集ノ發刊梅園文庫ノ設立皆先生ノ懿德ヲ欽慕スルノ衷情ニ出テ遠近都鄙先生ヲ謳歌セサルモノナキニ至ル斯村ニ斯人アリ實ニ村民ノ榮譽トスル所ナリ是ニ於テ乎大正四年二月二十四日本村會ハ滿場一致ヲ以テ毎年四月三十日(先生易實日)全村民及學校ノ業ヲ休ミ知名ノ士ヲ聘シ學校ニ於テ頌德講演會ヲ開キ梅園祭ヲ舉行センコトヲ決議ス是レ村民及子弟ヲシテ永ク先生ノ德澤ニ浴スルノ恩惠ヲ忘レザルト與ニ風俗人情ノ淳厚ヲ務メ處世ノ要訣志操ノ向上ヲ謀ラント欲スルニアリ

大正四年三月

第三回梅園祭並講演會概況

梅園祭式順序 (大正六年五月十日) 都台ニテ定日延期

午前十時一同着席
次 委員長ノ先導ニ依リ齋主着席
次 一同敬禮

次 委員長開式ノ辞
 次 修祓
 次 神職招魂詞
 次 献饌
 次 齋主祭文ヲ奏ス
 次 委員長祭文
 次 來賓祭詞
 次 玉串拜禮
 次 一同拜禮
 次 頌徳唱歌
 次 撤饌
 次 神職還魂詞
 次 委員長閉式ノ辞
 次 一同敬禮
 次 齋主以下一同退場
 表彰式順序

二

午前十一時三十分一同着席
 一 一同敬禮
 二 開式ノ辞
 三 君カ代合唱二回
 四 戊申詔書奉讀
 五 奉答唱歌合唱
 六 善行者及納稅優良部落表彰
 七 村長式辞
 八 來賓祝詞
 九 受賞者惣代答詞
 一〇 閉式ノ辞
 一一 一同敬禮
 右舉ッテ講演會開會
 來賓 杉本郡長 柴山梓築中學校長 島田女子師範學校長 森盲啞學校長 光山
 二豊新聞主筆 田原實陀寺住職 河野實科女學校長 南中部各町村長並ニ各
 小學校長 村内一般人士及學校兒童

三

會衆約一千名

祭文

此乃神龍爾招奉里坐世奉留贈從四位梅園三浦翁乃靈前爾齋主神職對田力謹美且白佐久汝翁波世爾双無支物知人爾坐世里志賀此乃里爾生出坐志々波此上無久辱支幸爾奉毛故冀爾此乃郡乃教育乃會人等思比起且與都城乃御前爾御祭仕開奉里且御德乎欽比奉里仰支奉里計禮波翁乃美名波久方乃雲井乃上爾開上里且畏支邊與里從四位天布高支位乎贈里給爾里支然禮波又會員等波記念頌德碑乎立梅園全集乎編美梅園文庫乎設計且翁乃學乃方廣久多加里志事乎世爾昔久知良令米計禮波翁乎仰支奉里稱爾奉留者彌益多久奈里行支許里故爰爾此乃里人乃有志等相謀里且此乃四月三十日波志毛翁乃身亡世坐志奴留日奈禮波今日乎吉日止撰比定米且年並乃御祭仕開奉留止各毛各毛御前爾參集比來且御食御酒種々乃味都物乎机代爾置支高成志且次々爾拜美奉里禮比奉里將翁乃御德乎頌美奉里稱爾奉留狀乎平久安久聞食世止白須如此仕開奉留爾依里且今志世乃中開計行久隨爾人乃心波薄久成里行波惡志久成里行計爾乎翁實顯世爾伊坐志々時乃如御靈乍其爾厚久成里善久成里行久可久守里給比幸爾給爾止齋主方山菅乃根乃惡爾爾藝奉里久止白須

祭文

維時大正六年五月十日東國東郡西武藏村長小野元次清酌庶羞ノ奠ヲ以テ贈從四位三浦梅園先生ノ靈ヲ祭ル
先生天資聰明精力絶倫夙ニ條貫理析ノ道ニ志シ刻苦研鑽遂ニ卓然トシテ自得シ茲ニ前人ノ未發

ナ啓キ天人ノ幽玄ヲ窺フニ至ル而モ敢言專ラ藝倫ヲ闡明シ忠信以テ人ヲ導キ世俗ノ嗽々タルニ憂戚セズ知己ヲ百千年ノ下ニ待テ廉險自ラ持シテ利用厚生ノ道ヲ説キ謙德禮聘ヲ固辭シ物外ニ超然トシテ沈潜反覆畢生稿ヲ捐テテ以テ有始有終ノ美ヲ濟シテ瑩泉ニ睡ラル嗚呼先生ノ碩學者徳ハ普ク天下ノ瞻仰措カサル所ナリ先生易實セラレテ茲ニ幾春秋幽德ノ潛光見ハレテ贈位ノ恩命ヲ賜ハリ百世ノ儀表千歳ノ碩德其ノ名彌々高シ茲ニ第三回祭典ヲ行フニ方リ遠近ノ名士ヲ迎フルノ光榮ヲ得タルハ全ク先生懿德ノ然ラシムル所トス在天ノ英靈又以テ慰スルニ足ラン尙クハ之レヲ饗ケヨ

祭詞

大正六年五月十日大分縣東國東郡長杉本安吉謹ミテ三浦梅園先生ノ靈ヲ祭ル嗚呼先生ノ易實シ給ヒテ茲ニ百二十餘年而モ先生ノ遺業並其ノ學徳ハ歲月ト共ニ彌明ニ先生ノ精神ハ河嶽トナリ日星ニ上リ乾坤壞レズ星晨遠ハサル限リ皇土ニ偏在シテ吾人後生ノ歸嚮スルトコロト照導シ給ハム哉本村是ニ鑑ミ大正四年村祭ヲ設ケ毎年四月三十日ヲトシテ先生ノ靈ヲ祭リ厥ノ德澤ヲ拜謝シ且ツ厥ノ懿德ニ浴セントス其ノ用意眞ニ至レリト謂フヘキナリ不肖此ノ盛典ニ列スルヲ得感愈々深シ茲ニ第三回式典ヲ修スルニ當リ聊爾藻ノ禮ヲ致ス英靈尙クハ照鑒セヨ

大正六年五月十日

大分縣東國東郡長 杉本 安吉

祭詞

大正六年五月十日謹シテ清酌庶羞ノ奠ヲ以テ故梅園三浦先生ノ神靈ヲ祭ル願フニ先生幼ニシテ
穎敏夙ニ思テ天地造化ノ理ニ潜メ研鑽寢食ヲ忘レ終ニ一家ノ新學說ヲ唱導スルニ至ル又善ク時
弊ヲ矯メテ忠孝ノ大義ヲ明ニシ以テ人心ノ歸趨ヲ示セリ其造詣ノ遠キ其識見ノ卓越ナル誠ニ一
世ノ範トスベシ爾來南豊ノ地碩學宏才ノ士彬々トシテ輩出セルモノ主トシテ先生ノ遺澤ニヨラ
スンハアラス余本日先生ノ墓門ニ拜シ回想追慕ノ情ニ堪ヘス忝シク敬忱ヲ薦ム

大正六年五月十日

大分縣立枳築中學校長 柴山 槐 郎

講演

● 偶 感

大分縣立枳築中學校長 柴山 槐 郎 氏

(文責速記者にあり)

- 只今御紹介になつた通り私は枳築中學の柴山であります。本日は梅園祭を行はれるので禮拜を兼ねて御邪魔に上りました。
- 何か話せこの事ですが持合せがないといつては御無禮ですが、昨夜先生の御宅に御邪魔になつて色々なもの拜見して感じた事を取敢えず偶感と題して御話します。
- 四五年前群馬縣前橋の或る學校の同窓會に出席して名士の方の講話を聞いた時に、市内の最大小學校長が此席の私と、同様に話の持合せなしに演壇に立つた。其の時手帳を出して或る頁に目を止めて豊後國東の儒者梅園先生に就て話すと前置をして、話し出された。
- 自分は何だか我が領地を侵された様な感じがしたが、併し又一面には遠く隔つた地の人から郷土の偉人について話されるこいふことは非常の誇と思つて心強い感じがしました。
- それがどんな話であるかといふと、先生の「戲に學徳に示す」の九ヶ條の學問は飯と心得べしとか學問はくさはなの様なりとか學問は置所によりて善悪わかるとか、足の皮は厚きがよしつらの皮はうすきがよしなどについて簡単に説明されたのでした。

○先生の訓戒が極く碎けて卑近で、題が奇抜でよく俗耳に入りやすい。彼の福岡の儒者貝原先生が、世間の人は歌をよく讀むが、自分は歌がない、歌は古今新古今に、盡きてゐる、といつてゐられた。それで先生には何でも辞世の歌が一つある其の外にはない。すべての著書は通俗的に説いて居る。

○私共が修養讀をするにも自分の腹から出た事をいふよりも郷土の偉人の立派な教があるから之れをもとにするがよいと思ふ。

○後に開いた事に前橋市の圖書館には前藩主の松平伯が一部の梅園全集を寄贈されてあつたのださうです。

○赴任後折あらは先生の御事蹟を研究して見たいと思つてゐるが、今日まで十分の調べも出来てゐないが、先生の著を讀んで見てもお話を承つて見ても學徳の申分なくすべて至誠一貫身を以て任ずるのお徳が備つてゐたと思はれる。

○昔からの偉人で色々美点はあるが反面又缺點も備へてゐる。梅園先生の如きは反面の缺點のないお一人である。之れは口では易くいへるが中々實現は困難な事である。

○先刻善行者表彰に秋吉氏が二十幾年同一の事をするといふ事は尋常一様では出来ない、永續は一面に犠牲の精神がなければならぬ、立身、名譽を打すつるといふ只其一事丈でも十分尊敬する價值がある。自分の作つた語でいふと「使丁を以て自分任じた」方である。

○今の學生や青年が成功といふ事を誤解してゐる、新聞や雑誌などで立身出世の事ばかりを書きたてて居るが、併し之は成功する方法にあらず、却つて青年を毒するものである。

○一躍して大富豪となり或は非常な名譽を得るといふ様な事は之れは成功の結果として來る事で、之れを目的として望んで行くのは誤つてゐる。

○つまり成功には二つの意義がある、一は上に向つての成功で一は下に向つての成功である、名譽財産を得たものは上に向つての成功で秋吉氏の如きは或る意味に於て下に向つての成功者である。

○人が自分の務を成し遂ぐる……自分自分の天分によりて其の務を盡すのが成功である先生は百年の以前に於て生きた手本を示されてゐる。

○森藩公よりの招聘を辞退して、朝飲孖溪水、夕臥孖山雲於晋手足矣の詩でよまれたが、先生は身を以て村夫子に任じたので下に向つての成功者である。流行の成功ならば應じたかも知れぬ。一生此土地を去られなかつたのは我にの生きた手本である。

○私は昨夜先生のお宅にお邪魔になつて、色々な書いたものや澤山な原稿を拜見し又邸内の一本一草を見ても先生愛護の跡があるかと思つて感慨無量であつた。

○殊に裏山の老杉についてはいふにいはれぬ感想が致しました。